

〈彙 報〉

彙報[†]
Miscellaneous News

日本研究教育年報. 2019, Vol. 23, pp. 87-126. ISSN 2433-8923

[†]



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC BY) 下に提供します。<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

2018 年度開講科目一覧

List of Courses 2018-2019

1. 世界教養プログラム（地域言語科目）／主専攻語科目

1-1. 地域言語 A（言語文化学部）

授業科目		授業題目	担 当	単位
日本語 I	共通	音声学・音韻論	風間	日本人 : 10 留学生 : 14
		日本語学入門・文法-	川村	
		日本語教育学入門	海野（春期）・望月（秋期）	
		近現代日本文学	セン	
	日本人	日朝対照言語学	韓	
	留学生	古文入門	川村	
		文章表現・読解	セン（春期）・海野（秋期）	
		口頭表現 I	海野（春期）・阿部（秋期）	
日本語 II	共通	文書資料講読（古典）	村尾	日本人 : 10 留学生 : 10
		文章資料講読 I	柴田	
		対照言語学総論	風間	
		日本語語彙論入門／文字・表記論入門	早津	
	日本人	比較文化論	木村（春期）・吉田（秋期）	
	留学生	口頭・文章表現 II	望月（春期）・阿部（秋期）	

1-2. 地域言語 A（国際社会学部）

授業科目		授業題目	担 当	単位
日本語 I	共通	日本語学入門・文法	佐藤	日本人 : 10 留学生 : 14
		近現代日本文学	セン	
		日本地域研究入門 I	吉田（春期）・木村（秋期）	
		日本地域研究入門 II	米谷（春期）・石居（秋期）	
	日本人	日朝対照言語学	韓	
	留学生	古文入門	川村	
		文章表現・読解	村尾	
		口頭表現 I	阿部（春期）・海野（秋期）	
日本語 II	共通	文章資料講読 I	柴田	日本人 : 8 留学生
		比較文化論	木村（春期）・吉田（秋期）	
		近代資料講読／文章資料講読（社会）	嶋（春期）・米谷（秋期）	

		日本語語彙論入門／文字・表記論入門	早津	: 10
	留学生	口頭・文章表現Ⅱ	阿部（春期）・望月（秋季）	

1－3. 主専攻語科目（外国語学部）

2 年次

授業科目		授業題目	担 当	単位
日本語Ⅱ	共通	対照言語学総論	風間	日本人 : 12 留学生 : 12
		文章資料講読（古典）	村尾	
		日本語語彙論入門／文字・表記論入門	早津	
		文章資料講読Ⅰ	柴田	
		比較文化論	吉田（秋期）	
		近代資料講読	嶋（春期）	
		文章資料講読（社会）	米谷（秋期）	
	留学生	口頭・文章表現Ⅱ	望月・阿部	

*今年度履修者なし。

2. 地域科目

2－1. 地域基礎科目

言語文化学部・国際社会学部

授業科目	授 業 題 目	開講学期	単位	担当
地域基礎 1A（日本 1）	近代日本のアジア観 －〈南方・南洋〉をめぐって	春期	2	大久保
地域基礎 1A（日本 2）	An introductory overview of Japanese politics	春期	2	春名
地域基礎 2A（日本 1）	近現代日本史「知識」の批判的分析	春期	2	木村
地域基礎 2A（日本 2）	日本の都市と建築	秋期	2	中尾
地域基礎 2A（日本 3）	日本史入門	秋期	2	ポーター
地域基礎 2A（日本 4）	近代日本の文化と社会	春期	2	友常

*外国語学部の地域基礎科目（「日本地域基礎Ⅱ」）は、言語文化学部・国際社会学部の地域基礎科目（「地域基礎 1A（日本 1）」）と合同で開講された。

2－2. 地域専門科目

*今年度の地域専門科目（「地域言語論」「地域文化論」「地域社会論」）は全て専修専門科目と合同で開講された。専修専門科目の一覧を参照のこと。

3. 専修プログラム／専修専門科目

＊「授業科目」が専修専門科目名（外国語学部）と異なる場合、「備考」にその科目名を記す。

＊この他、各教員の担当する卒業論文演習・卒業研究演習（各 4 単位）あり。

3-1. 言語・情報コース

授業科目	区分	授 業 題 目	開講 学期	単 位	担当	備 考
言語研究入門	講義	おもしろいぞ言語学・日本語諸方言 編 B	秋期	2	風間	
日本言語研究 概論	講義	おもしろいぞ言語学・日本語諸方言 編 A	春期	2	風間	
	講義	日英語対照： 英語で説明する日本 語文法	春期	2	望月	
	講義	Survey of Japanese Grammar with Comparative Perspective from English	秋期	2	望月	
	講義	現代語文法	春期	2	川村	地域言語論と共通
日本言語研究	講義	文法史	秋期	2	川村	地域言語論・国語 科教育法Ⅰと共通
	講義	現代日本語の語彙・意味	春期	2	丸山	
	講義	コーパス日本語学入門	秋期	2	丸山	
	演習	日本語史研究 1	春期	2	川村	
	演習	日本語史研究 2	秋期	2	川村	
	演習	文法と語彙	春期	2	早津	
	演習	文法と語彙	秋期	2	早津	
	演習	言語教育のための日英語対照研究 と言語理論Ⅰ	春期	2	望月	
	演習	言語教育のための日英語対照研究 と言語理論Ⅱ	秋期	2	望月	
	演習	日本語の第二言語習得演習 1	春期	2	海野	
	演習	日本語の第二言語習得演習 2	秋期	2	海野	
言語学 特殊研究	講義	おもしろいぞ言語学・感動編 A	春期	2	風間	日本地域言語論・ 言語記述理論と共 通
	講義	おもしろいぞ言語学・感動編 B	秋期	2	風間	日本地域言語論・ 言語記述理論と共 通
	演習	言語学演習	春期	2	風間	
	演習	言語学演習	秋期	2	風間	

3-2. グローバルコミュニケーションコース

授業科目	区分	授 業 題 目	開講 学期	単 位	担当	備 考
グローバルコミュニケーション研究入門	講義	Introduction to Japanese Language Education in the Era of Globalization	秋期	2	櫻井	
日本語教育学概論	講義	日本語教授法	春期	2	谷口	
	講義	日本語教育のための音声トレーニング	秋期	2	阿部	
日本語教育学研究	講義	日本語の第二言語習得論	春期	2	海野	
	講義	日本語教育のための音声教育実践	春期	2	阿部	
	講義	日本語の第二言語習得入門	秋期	2	海野	
	講義	語用論、談話分析	秋期	2	ツオイ	
	演習	語用論と日本語教育 1	春期	2	谷口	
	演習	日本語教育学演習	春期	2	阿部	
	演習	日本語教育学演習	秋期	2	阿部	
	演習	日本語の第二言語習得演習 1	春期	2	海野	
	演習	日本語の第二言語習得演習 2	秋期	2	海野	

3-3. 総合文化コース

授業科目	区分	授 業 題 目	開講 学期	単 位	担当	備 考
総合文化研究入門	講義	日本文化研究入門	秋期	2	柴田	
日本文化研究	講義	日本文学と他界	春期	2	柴田	日本文学と共通
	講義	日本古典文学 1	春期	2	村尾	日本文学と共通
	講義	日本古典文学 2	秋期	2	村尾	
	講義	近現代日本の文学と文化的社会的背景	春期	2	坂東	
	講義	近現代日本文学 1	春期	2	セン	日本文学と共通
	講義	近現代日本文学 2	秋期	2	セン	日本文学と共通
	演習	近代文学演習	春期	2	柴田	
	演習	近代文学演習	秋期	2	柴田	
	演習	日本古典文学 1	春期	2	村尾	日本文学と共通
	演習	日本古典文学 2	秋期	2	村尾	日本文学と共通

3-4. 地域社会研究コース

授業科目	区分	授 業 題 目	開講 学期	単 位	担 当	備 考
日本地域研究	講義	日本近世・近代都市社会史	春期	2	ポーター	
	講義	19 世紀日本における貧民の救済と統制	秋期	2	ポーター	
	講義	民衆史Ⅰ マイノリティ・スタディーズ	春期	2	友常	日本地域社会論と共通
	講義	民衆史Ⅱ 宗教と芸能	秋期	2	友常	日本地域社会論と共通
	講義	日本の歴史—地域社会と人々の暮らし—	春期	2	嶋	日本地域社会論と共通
	講義	日本の古文書を読む	秋期	2	滝口	日本地域社会論と共通
	講義	現代日本経済史	秋期	2	河村	日本地域社会論と共通
	講義	近代日本思想とアジア	秋期	2	米谷	日本地域文化論と共通
	演習	19 世紀日本における都市貧困の社会史	春期	2	ポーター	
	演習	幕末・維新期大阪の都市社会史	秋期	2	ポーター	
	演習	日本の伝統社会を考える	春期	2	吉田	
	演習	日本の伝統社会を考える	秋期	2	吉田	
	演習	近代日本社会とマイノリティⅠ	春期	2	米谷	日本文化論と共通
	演習	近代日本社会とマイノリティⅡ	秋期	2	米谷	日本文化論と共通
	演習	都市と生政治—都市研究・クィア研究・マイノリティ研究の視点から 1	春期	2	友常	
	演習	都市と生政治—都市研究・クィア研究・マイノリティ研究の視点から 2	秋期	2	友常	

2018 年度修士論文・修士研究題目
List of M.A. Theses/Projects 2018-2019

大学院総合国際学研究科 博士前期課程

氏 名	指 導 教 員	論 文 題 目	備考
言語文化専攻 言語・情報学研究コース			
リ ョ ウ シ カ	望 月 圭 子	日本語母語話者における中国語アスペクト表現の習得：中国語学習者コーパスに基づく分析	
世界言語社会専攻 言語文化コース			
佐 田 陸	風 間 伸 次 郎	西フリジア語における完了形の助動詞 <i>hawwe / wêze</i> の選択に関する研究	*
中 村 京 介	風 間 伸 次 郎	長崎県五島宇久島野方方言の文法概説	*
橋 本 直 樹	風 間 伸 次 郎	トルコ語の補助動詞 <i>-Iver</i> について	*
石 田 智 裕	望 月 圭 子	中国語助動詞“会”の誤用から見る中国語・日本語の未実現表現——中国語・日本語学習者コーパスに基づいた対照研究——	*
オ ウ セ イ ジ ョ	望 月 圭 子	日本語と中国語におけるアスペクト表現の文法化——空間・時間の認知的視点から——	*
セ ン メ ン ジ ョ	望 月 圭 子	コーパス分析による日本語複合動詞「～こむ」の用法と習得	*
フ ァ ム テ イ タ イ ン タ オ	望 月 圭 子	ベトナム語からみた日本語のアスペクト複合動詞	*
リ ュ ウ セ イ コ ウ	望 月 圭 子	中国語アスペクト助詞＜了＞の誤用：中国語学習者コーパスにおける日本語・英語母語話者による第二言語習得の対照研究	
世界言語社会専攻 国際社会コース			
泉 田 浩 子	吉 田 ゆ り 子	近世日本における東北アジア認識	*
テ イ コ ウ ク ン	吉 田 ゆ り 子	近代日本におけるモンゴル認識—美術・音楽を素材に—	*
国際日本専攻 国際日本コース			
多 田 奈 保 美	阿 部 新	ヒンディー語を母語とする日本語学習者の産出行為（発音とディクテーション）	
南 井 美 香	阿 部 新	言語聴覚療法を用いた日本語音声指導の実践	*
志 摩 瞳	伊 東 祐 郎	トランス・ランゲージング・スペースを活用したネパール人高校生の日本語作文の教育活動についての考察	*
平 井 遥	伊 東 祐 郎	外国につながる子どもたちを育む日本語教育の実態と展望—ボランティアによる学習支援の観点から—	
朝 久 弘 崇	海 野 多 枝	英語を母語とする上級日本語学習者の助数詞「本」の習得	*
紺 屋 洋 亮	海 野 多 枝	語彙のネットワークから見たポーランド人日本語学習者の語彙学習	

＜彙報＞2018 年度修士論文・修士研究題目

サ ブ ナ リ ハジミ プトリ	海 野 多 枝	EPA に基づくインドネシア人看護師国家試験合格者の現状—日本に長期滞在しない理由—	
ゴ シ キ	川 村 大	受身表現に相当する機能動詞結合に関する考察	*
シュウ ゲン	川 村 大	話し言葉における受身文の日中対照研究—その使用条件を中心に—	*
ロジクリエバ ジェ ネット	川 村 大	トルクメン語と日本語の受身文に関する対照研究—実例調査をもとに—	
ジェ マ エ フ ラ ヒ モ ナ リ	川 村 大	日本語とウズベク語の受身文の対照研究	
リ ギ ヨ ウ セ イ	楠 本 徹 也	日本語におけるノダ文及び対応する中国語表現について	*
ソン ショウウ	楠 本 徹 也	中国人日本語学習者における「そうだ」「ようだ」「らしい」の習得状況について—アンケート調査の結果を通して—	*
セン エンテイ	楠 本 徹 也	接触場面における終助詞「ね」「よ」「よね」の使用状況—機能分析を中心に—	*
栗 山 直 樹	柴 田 勝 二	村上春樹作品における「やれやれ」の変遷について	*
タイ イエツ	柴 田 勝 二	村上春樹作品における「分身」の象徴性	
サイ ギ ヨ ウ イ	柴 田 勝 二	村上文学における神話的叙述—考—作品が語る冒険から見る自我構築	*
チャラゴヴァ マリア ペトロヴァ	柴 田 勝 二	夏目漱石の『こころ』とドストエフスキーの『白痴』における愛のかたち	*
リ チョウウ	鈴 木 智 美	日中同形の二字漢語における品詞の相違に関する考察—中国語の形容詞と同形である日本語のサ変動詞の語構成的・意味的特徴を中心に—	*
テイ キョウギ	鈴 木 智 美	学習者は教師からの作文フィードバックをどう活用するか—中国人中級日本語学習者への考察を中心に—	*
ヨウ キ セ イ	鈴 木 智 美	中国語を母語とする日本語学習者の助数詞習得に関する研究—「つ」「個」のとらえ方を中心に—	*
ポパ アントン ミハイ	鈴 木 智 美	ルーマニア語を母語とする上級日本語話者の日本語習得の課程についての研究—インタビュー調査に基づいて—	
石 本 暉 乃	友 常 勉	内村鑑三における義	
鴨 美 和 子	友 常 勉	三越百貨店の学俗協同についての考察	
ム ジャ ワ ル アフリン シャービル	友 常 勉	日本とインドの企業における就業経験比較と将来構想—在日インド人会社員のナラティブ・データーから—	
船 戸 雅 也	友 常 勉	石田梅岩の思想における開悟と儒教的コスモロジー	
ヨウ シ ウ	中 井 陽 子	日本語の口頭発表におけるフィラーに対する評価	*
リ チョウケイ	中 井 陽 子	コミュニケーション能力を向上させるための教室活動の検証—学習者の内省活動に基づいて—	*

＜彙報＞2018 年度修士論文・修士研究題目

テ イ ウ シ	中 井 陽 子	中国人日本語学習者のあいづちの使用実態の研究ー日本語母語話者の評価からー	*
ウイモンサラウオン アハ°ポ°ン	中 井 陽 子	日タイ接触場面の日本語会話における言いさし発話の分析	*
石 丸 舜	花 蘭 悟	日本語条件文の習得について～英語母語話者の「たち」を中心に～	
折 田 知 之	早 津 恵 美 子	日本語表記の多様性	*
井 澤 弘 子	早 津 恵 美 子	へノ格についての一考察	*
小 林 ゆ か り	早 津 恵 美 子	格助詞と接続助詞の連続性ー「のが」を中心にー	*
リ ギ ヨ ウ カ	藤 森 弘 子	中国における日本語学習者の動機づけの変化とその要因ー自己決定理論の視点からー	*
チ ヨ ウ ヒ	藤 森 弘 子	日中接触場面の日本語会話における「聞き返し」の研究ーディスコース・ポライトネス理論の観点からー	
クレショウゝァ ユリア	藤 森 弘 子	ロシア人日本語学習者によるアイロニーの使用とそれに対する日本人の評価	
中 村 彩 希	宮 城 徹	留学生にとっての「居場所」とは・国費外国人留学生へのインタビュー調査から・	*
キ ン チ ヨ ウ	村 尾 誠 一	日本古典詩歌における植物表現の比較文学的研究ーいわゆる四君子の表現を中心にー	*
キ ヨ ウ カ テ キ	村 尾 誠 一	源氏物語論ー和漢比較文学的な視野による女君の死と子孫への継承の考察	*
二 階 健 次	村 尾 誠 一	雲玉和歌抄とその時代； 人物と詞書にみる中世和歌の一齣	*
チ ン メ イ ウ	林 俊 成	中国日本語ネットスクール学習者の現状調査に関する研究ー教師への提言を視野に入れるー	
ヤ シ コ	林 俊 成	中国の地方における日本語学習者のネット利用現状と学習サイトの現状調査ー二つの大学の日本語学習者を比べ	
ソ ン カ イ セ イ	林 俊 成	スカイプを通して行った遠隔教育におけるビリーフ調査ー台湾の大学生を対象にー	
メフモノフ ファルフシ°ン	林 俊 成	ウズベク人日本語学習者の「ほめ」への応答とそれに対する日本語母語話者の評価	

*については、p. 96 以降に修士論文要旨を掲載

2018 年度修士論文・修士研究要旨
Abstracts of M.A. Theses/Projects 2018-2019

佐田 陸 (サタ ヒトシ) 「西フリジア語における完了形の助動詞 **hawwe / wêze** の選択に関する研究」

本稿では、西フリジア語の完了助動詞 **hawwe / wêze** の選択の原理的説明を試みる。調査では、KNAW (Koninklijke Nederlandse Akademie van Wetenschappen) 作成の、西フリジア語の話し言葉コーパスである **Korpus Sprutsen Frysk** (以下、KSF) を使用し、完了形を含む用例を収集した。KSF は、総語数 650,000 語 (総計 65 時間) の話し言葉を書き起こしたものである。得られたデータを、主に Lieber and Baayen (1997) がオランダ語の助動詞選択に関して提案した [IEPS] 素性を用いて分析し、西フリジア語の助動詞選択の原理について考察を行う。そして、この [IEPS] 素性と、Sorace (2000) が通言語的な助動詞選択に関して提案した助動詞選択階層を用いて、西フリジア語の助動詞選択現象を説明できることを主張する。ならびに、西フリジア語の助動詞選択を他の言語、とりわけドイツ語、イタリア語と見比べることも可能な限り行う。

中村 京介 (ナカムラ キョウスケ) 「長崎県五島列島宇久島野方方言の文法概説」

本論文では、長崎県五島列島宇久島野方方言 (以下、野方方言) の文法の概要を、記述言語学の立場から明らかにした。第 1 節では、本研究の導入として、言語の概要と本研究の概要を示した。第 2 節では、野方方言の音韻論についての概説をおこなった。第 3 節では、これ以降の文法記述に必要な単位や概念の導入をおこなった。第 4 節から第 6 節では、野方方言の名詞形態論、動詞形態論、形容詞形態論をそれぞれ概説した。第 8 節では、連体詞・間投詞・副詞の記述をおこなった。第 9 節では、品詞転換を起こす派生接辞の記述をおこなった。第 10 節と第 11 節では、名詞句の構造と述語句の構造をそれぞれ示した。第 12 節では、野方方言の構文的特徴を記述した。第 13 節では、複文の記述をおこなった。第 14 節では、意味・談話の面から野方方言の文法記述をおこなった。

橋本 直樹 (ハシモト ナオキ) 「トルコ語の補助動詞 **-(y) Iver** について」

本論文では、トルコ語の補助動詞の内の一形式 **-(y) Iver** について扱う。まず補助動詞 **-(y) Iver** の意味、形態統語的側面について調査を行い、さらに文法化の度合いという枠組みで、他の補助動詞との相対的な位置づけを明らかにした。

先行研究では、**-(y) Iver** が表す恩恵性の意味については記述されていないものもある。さらに、否定接辞に前接する例と後接する例が見られるが、その使い分けは不明瞭である。上記の 2 点を明らかにするため、まず **-(y) Iver** の意味・統語的不安定さに着目した二つの調査を行い、補助動詞 **-(y) Iver** の表す機能は本動詞の種類によって影響を受けることを示した。

次に、補助動詞 -(y) Iver, -(y) Agel, -(y) Adur, -(y) Ayaz, -(y) Akal の用例を収集し、比較した。結果として、それぞれの補助動詞の使用には一定の傾向が見て取れること、文法化の程度に差があることを定量的に明らかにした。

石田 智裕 (イシダ トモヒロ) 「中国語助動詞“会”の誤用から見る中国語・日本語の未実現—中国語・日本語の学習者コーパスに基づいた対照研究」

本論文は、日本語を母語とする中国語学習者による中国語作文 425 件を所蔵する「Learners' Error Corpora of Chinese Searching Platform」(http://ngc2068.tufts.ac.jp/corpus_ch/)における、「可能性を表す助動詞“会”」の脱落について検証するものである。最初に“会”脱落が起る文脈及び共起語について考察する。その後、“会”脱落が起った文について日本語訳を試み、どのような日本語表現と“会”とが翻訳時に対応しているのかを明らかにする。この検証から、可能性を表す“会”は事象に前後関係があり、ある種の「非現実」の文脈で使用されること、日本語では「ル形」との対応関係が強く、訳出しづらいことが明らかになった。最後に、日本語を母語とするペルシア語学習者の誤用分析を参考に、日本語話者にとって「可能性の標識」が学習困難点であることを明らかにした。結論として、“会”が使用できないことは、日本語の可能性標識の義務性の低さという特質に影響を受けているとした。

王 清汝 (オウ セイジョ) 「日本語と中国語におけるアスペクト表現の文法化—空間・時間の認知的視点から—」

本論文は「V テイル」と「V 到」を中心にして日本語と中国語のアスペクト表現の文法化を考察する。

本論文の目的は、第一に、日本語と中国語のアスペクト表現における文法化がどのような異同があるのかを明らかにすることである。

第二に、日本語母語話者における中国語の「V 到」の誤用の実態と原因を明らかにすることである。日本語母語話者は中国語の動補構造を習得する際、動補構造「V 到」の誤用がもっとも顕著である。「到」は移動動詞から文法化のプロセスを経て、多項目文法化されているが、語彙的な意味が依然として残されている。「V 到」の意味及び用法の複雑性が誤用に影響を与えないとはいいにくいらしく考えられる。

結論としては、第一に、日本語と中国語のアスペクトの文法化のプロセスは相似性が示されている。第二は、「V 到」の前項動詞のタイプの違いによって、「V 到」と対応する日本語の形式も違ってくるという傾向が見られる。

銭 夢潔（セン メンジェ） 「コーパス分析による日本語複合動詞「～こむ」の用法と習得」

日本語には「動詞の連用形＋動詞型」のような複合動詞が数多く存在し、その中で、複合動詞「～こむ」は最も生産性が高い。しかし、「～こむ」の意味は非常に多様で、学習者にとって習得は極めて困難である。

本稿は日本語母語話者と日本語学習者の両方の立場から、「～こむ」の習得状況と使用実態を明らかにし、言語教育に寄与したい。第一に、学習者コーパスのデータとアンケート調査の結果に基づいて、学習者の習得状況を解明する。それを踏まえた上で、均衡コーパスのデータを基に、「～こむ」と共起する名詞を調べる。そして、中国語の方向補語“～进 jìn”と名詞の共起を整理し、対照の観点から、「～こむ」の性質を分析する。

最後に、名詞、格助詞との組み合わせから見た「～こむ」の特徴をクラスター分析で明らかにし、従来の意味分類との接点や差異を見出し、「～こむ」における用法上の新分類を提出する。

ファム ティ タイン タオ 「ベトナム語からみた日本語のアスペクト複合動詞」

本研究は、まず、日本語の複合動詞の後項成分のうち、最も頻度数が高い「～込む」「～出す」「～上げる／上がる」を取り上げ、日本語とベトナム語との対応関係を考察し、両言語における対応可能な範囲を明らかにした。次に、第二言語習得の観点から、国立国語研究所で公開されている「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(I-JAS) を利用し、ベトナム人日本語学習者による複合動詞の使用実態を調査した。また、学習者は複合動詞の産出性が低いといっても、複合動詞を理解していないとは限らないため、「複合動詞文の受容テスト」を作成し、ベトナム人日本語学習者による理解実態についての調査を行った。最後に、上記の議論及び分析結果に基づき、ベトナム人日本語学習者向けの教授法への提言を試みた。

泉田 浩子（イズミダ ヒロコ） 「近世日本における北東アジア認識—明清交替期の韃靼漂流を中心として—」

本論文では、明清交替期の韃靼漂流を研究対象として、一六四〇年代を中心に近世日本で「韃靼」と呼ばれた地域を、幕閣、藩の役人、漂流民がどのような思想的背景から捉えたのかを明らかにし、その後の「韃靼」呼称の使用の変化を考察した。結論として、一六四〇年代には清を夷狄＝韃靼とする幕府の夷狄観念が幕藩体制下の共通の認識ではなかったことを明らかにし、また近世中後期になると「韃靼」は地理概念として使用されるようになっていくことを指摘した。

テイ コウケン 「近代日本におけるモンゴル認識—美術・音楽を素材に—」

本論文は日清戦争以降の北東アジア地域の社会情勢を入れながら、美術・音楽という視

点から近代日本におけるモンゴル認識について検討し、明らかにすることを目的としたものである。まず、近代日本とモンゴルの関係を論じた。次に、日本人による写真・ポスター・絵葉書といった史料を用いて日本のモンゴル認識を検討した。また、日本人により創作されたモンゴルを題材にした絵画作品や音楽作品を分析し、それらの作品を通して、モンゴルとモンゴル人はどのように描かれていたかを考察した。

南井 美香（ミナイ ミカ） 「言語聴覚療法を用いた日本語音声指導の実践」

本研究は日本語非母語話者である学習者の単音の誤りに焦点を当て、言語聴覚士が行う言語聴覚療法の考えに基づいて、その手順・手法を用い、検査、評価、訓練を行った。調査は JSL, JFL 環境での学習者を対象に問診・検査を行った後、全 5～8 回、個別指導またはグループ形式で「発音トレーニング」を実践した。訓練終了後、参加者に質問紙調査と再検査を実施した。その結果、トレーニングは、発音の問題を認識でき、正しい音の出し方を習得できる内容だったことがわかった。訓練前後の発音を言語聴覚士に評価してもらい、訓練後の誤り音の数が減少し、発音改善が認められたことがわかった。以上から非母語話者の発音の誤りが言語聴覚療法の手順・手法によって改善され、日本語教育に応用可能であることが明らかになった。問診・検査で問題を網羅的に把握し、学習者の特性を考慮し、訓練を組み合わせ、段階的に進めることが効果的であることが示唆された。

志摩 瞳（シマ ヒトミ） 「トランス・ランゲージング・スペースを活用したネパール人高校生の日本語作文の教育活動についての考察」

本研究では、日本のネパール人高校生の作文過程において、彼らが持つ言語資源を活用することを許容したトランス・ランゲージング・スペース（以下、TLS）を提供し、そのなかでどのようなトランス・ランゲージング（以下、TL）が起こっているか実態を探り、日本語作文指導にどのような教育効果が見られるか探ることを目的とした。ネパール人高校生 3 名を対象に、1) 作文 1 回目、2) TLS におけるディスカッション、3) 作文 2 回目、4) 内省ディスカッションの手順で調査した結果、思考する・書く・話すなど様々な段階において母語のネパール語以外にも彼らの持つ言語資源を活用して作文を書き、TL の特徴として滞り期間などの 4 大要因や母国での学習言語の影響を受けていることが分かった。教育効果については、語彙などの量的な面で作文執筆に効果があることが分かったが、生徒と母語を共有しない教員がどのように指導するかについては今後も検討する必要がある。

朝久 弘崇（アサヒサ ヒロタカ） 「英語を母語とする上級日本語学習者の助数詞「本」の習得」

助数詞「本」のような多義語を L2 学習者が学ぶ際、その中心的意味は習得しやすいが周辺の意味は習得しづらいといわれている。本研究では、①母語話者と学習者で「本」の意味構造に違いはあるか、②違いの要因は何か、③それで誤用が生まれることがあるか、

という研究設問を設定し、母語話者、学習者双方の「本」の習得状況を調査した。結果、「本」のプロトタイプ・イメージは学習者の方が母語話者のそれよりも限定的であること、母語話者はすべての用法を少なくとも理解語彙的レベルで習得しているが学習者は習得していない用法もあることが分かった。その要因として、初級教科書で「本」を導入する際扱う名詞が限られていること、学習者が日本語を学ぶ中でのインプットが足りない用法があることが挙げられる。ただし「本」のある用法を習得していなくとも、学習者は適切な方略で代わりの助数詞を選択するため、誤用に繋がることは少ないことも分かった。

呉 詩卉（ゴ シキ） 「受身表現に相当する機能動詞結合に関する考察」

従来日本語の受身表現の考察は形態論と統語論（動詞の形式と名詞の格形式）の面から多くなされているが、本稿は動詞レル・ラレル形の形態的な特徴をもたない受身表現について考察した。たとえば、「太郎が花子からさそいをうけた」が挙げられる。本稿では、動詞「うける」「える」「あつめる」「あびる」の機能動詞用法をめぐって、○1 形態的に共通部分を持つ動詞レル・ラレル形と交替可能か否か○2 機能動詞と共起する名詞の特徴○3 機能動詞による受身表現の主語の種類（有情/非情）○4 受身以外の文法機能の兼務○5 他の機能動詞と交替可能か否かという 5 つの観点から考察した。最後にクラスター分析とコレスポンデンス分析を用いて、動詞間の文法的な性格の近さ遠さを考察した。結果からみれば、受身表現を作る機能動詞の文法的なふるまいは一樣ではなく、それぞれの性質を持っているということが分かった。

周 源（シュウ ゲン） 「話し言葉における受身文の日中対照研究—その使用条件を中心に—」

本研究は、日中両言語の話し言葉における受身文の使用実態を調査するために、現代日本と中国のテレビドラマや映画にある受身文を抽出し、その主語と行為者をそれぞれ 12 種類に分けて実例を挙げながら記述した。また、今回の調査結果に基づいて日本語と中国語の話し言葉における受身文の類型と受身文の主語・行為者の有生性との関係についても考察を行った。

李 曉晴（リ ギョウセイ） 「日本語におけるノダ文及び対応する中国語表現について」

本研究は『砂の女』『黒い雨』『錦繡』の 3 冊の小説から収集した 874 のノダ文をもとに、日本語におけるノダ文及び対応する中国語表現について考察を行った。結果として、まず、ノダ文の複数の語用論的機能において、「状況説明」「理由・原因・根拠」「発見」がノダ文の最も一般的な用法であるということが分かった。そして、ノダ文の意味・機能と中国語表現との間の具体的な対応関係として、具体的にノダ文の各意味・機能のいずれも無標識の文に対応する傾向が最も強いが、有標識の文に対応する場合、「状況説明」「理由・原因・根拠」「強調」「告白」「教示」「換言」及び「再認識」のノダは“(是)……的”に、「命令」「発見」の

ノダは“是……”に、「決意のノダ」は助動詞に最も強く対応し、反対に、“(是)……的”、“是……”は「理由・原因・根拠のノダ」に、助動詞は「決意」のノダに、語気助詞においては「発見」のノダに最も強く対応することが見られる。

孫 篠雨（ソン ショウウ） 「中国人日本語学習者における「そうだ」「ようだ」「らしい」の習得状況について—アンケート調査の結果を通して—」

本研究は、中国人日本語学習者を対象に、「そうだ」「ようだ」「らしい」について、それらの各機能に関するアンケート調査を行い、彼らの「そうだ」「ようだ」「らしい」の習得状況を分析・考察したものである。本研究では、中国国内の中国人日本語学習者に焦点をあて、彼らの「そうだ」「ようだ」「らしい」の習得状況を機能別に分析し、中国国内の中国人日本語学習者の習得状況を明らかにした。まず、中国人日本語学習者は[様態]の「(し) そうだ」の習得度が最も高く、学習過程において最も印象に残っていることが考えられる。また、中国人日本語学習者にとって「(し) そうだ」と「ようだ」の使い分けが難しいことが明らかになった。記述問題では中国人日本語学習者は「そうだ」「ようだ」「らしい」についてある程度の用法についての知識を持っているが、正しく把握していないことが明らかになった。

銭 婉婷（セン エンテイ） 「接触場面における終助詞「ね」「よ」「よね」の使用状況—機能分析を中心に—」

本研究の目的は、今までの終助詞「ね」「よ」「よね」に関する研究を整理し、それらの機能分類を分析の枠組みとして、中国国内と日本国内における接触場面と母語場面の自然会話データの分析を行う。中国国内と日本国内という接触場面における中国人日本語学習者の終助詞の使用頻度の状況、機能の使用状況を男女別に分けて比較し、日本語母語話者との違いを明らかにする。その結果、中国人日本語学習者は日本語母語話者より「よね」の使用が少ない。また、両方とも同じく「ね」の「聞き手への同意を示す、または同意を求める」、「話し手の認識としての判断を示す」機能を多く使用しているが、女性の日本語母語話者は「発話内容の確認を求める」の機能も多用している。最後に、終助詞の使用実態を基に、中国人日本語学習者における終助詞の使用問題を取り上げる。その結果から中国人日本語学習者が終助詞「ね」「よ」を多用している原因を推測する。

栗山 直樹（クリヤマ ナオキ） 「村上春樹作品における「やれやれ」の変遷について」

本論文「村上春樹作品における「やれやれ」の系譜」は、村上春樹が作中で多用する感嘆詞・「やれやれ」がどのような状況で使用されているかについて分析したものである。論文では、『1973年のピンボール』で「やれやれ」が「ピンボールの集金人兼修理人」を描写する際に初めて使用されていたことを指摘し、三部作においては僕と鼠の分裂を示唆する用語として使用されたことから議論を開始した。『羊をめぐる冒険』で僕は「やれやれ」が

自分の口ぐせとなっていることを自覚した。村上作品では、拒否できない要請を受容せざるを得ない状況に受容的になることが「やれやれ」の使用を促す大きな要因として作用している。この傾向は、三人称の語りを部分的に導入した『海辺のカフカ』で変質する。村上の語り手・「僕」と「やれやれ」の結びつきの強さが崩れ、「やれやれ」の受容性は希薄化し、田村カフカの思考や行動を承認するだけの言葉として作中で使われるのみとなる。

柴 暁璋（サイ ギョウイ） 「村上文学における神話的叙述一考—作品が語る冒険から見る自我構築」

本稿は、村上春樹の初期三部作(『風の歌を聴け』、『1973 年のピンボール』、『羊をめぐる冒険』)、『海辺のカフカ』と『1Q84』を研究対象とし、神話的着想とその象徴性という視点から、村上春樹の作品世界における魅力と独創性を考察するものである。また、村上文学における神話的着想を考察する上で見過すべきでない点として、『羊をめぐる冒険』、『海辺のカフカ』、『1Q84』などでは、村上の作家としての経歴において画期をなしてきた小説には必ず登場する、「父性」というキーワードであるこれらはつねに大事なテーマであり、そしてここに挙げた三長編はすべて〈王殺し＝父殺し〉の話型を持っており、〈王殺し〉あるいは〈父殺し〉の主題が、村上作品を考える上で重要な問題となる。本文では、第一章から第三章かけて〈王殺し＝父殺し〉を軸に、村上文学における神話的着想と登場人物やことにまつわる象徴性を論述する。

チャラゴヴァ マリア ペトロヴァ 「夏目漱石の『ころ』とドストエフスキーの『白痴』における愛のかたち」

本論文は、夏目漱石（1867 年～1916 年）の『ころ』とドストエフスキー（1821 年～1881 年）の『白痴』における愛のかたち及び登場人物の心理の類似性を明らかにしたものである。

漱石におけるドストエフスキー受容については、古くから論じられてきたが、本論文では、漱石とドストエフスキーにおける問題意識の共通性による『ころ』と『白痴』の内実の近似性に焦点を当てる。いずれも恋愛を軸にした小説ではあるが、純粋な恋愛小説とはいえない。むしろ、愛が引き金となって生じる一連の悲劇を通して、近代化の時代における人間関係の有り様が映し出されているといえる。よって、本論文では、『ころ』と『白痴』における愛のかたちがどのように近代日本とロシアの現実を反映しているかについて検証する。

李 超宇 (リ チョウウ) 「日中同形の二字漢語における品詞の相違に関する考察 -中国語の形容詞と同形である日本語のサ変動詞の語構成的・意味的特徴を中心に-」

本研究の目的は、中国語の二字形容詞と同形である日本語の二字漢語のうち、中国語の形容詞とは品詞にずれが生じ、日本語においてサ変動詞となるものの語構成的・意味的特徴を明らかにすることである。第 1 章では研究の目的・研究対象を述べ、第 2 章では先行研究の問題点について述べた。第 3 章では中国語の二字形容詞と同形である日本語の二字漢語を抽出し、品詞分布の全体像を明らかにした。第 4 章～第 6 章では抽出した二字サ変動詞に見られる語構成的・意味的特徴、サ変動詞として使用される頻度、及び日本語教育の観点から見た難易度について述べた。第 7 章ではまとめとして、中国人日本語学習者にとって、誤用を防ぐためには、抽出したサ変動詞に特徴的に見られる語構成とその意味分野に注意する必要があること、及び今後の課題として、誤用の生じやすい語をリスト化することとサ変動詞以外の誤用の生じやすい品詞についても考察が必要であることを述べた。

程競儀 (テイ キョウギ) 「学習者は教師からの作文フィードバックをどう活用するか -中国人中級日本語学習者への考察を中心に-」

本研究では、JSL 環境における中国人日本語学習者の作文作成における修正の過程に焦点を当て、教師による作文のフィードバック (以下、FB) について、学習者がどのように利用し、修正しているのか、教師はどのような FB をしているのかを検討するために、中国人中級日本語学習者 10 名を対象に調査を行った。その結果、1) 文法・語彙において、修正の FB が最も多かったが学習者にとって理解できないこともある。表記に関しては、修正とコメントの FB が多く占められており、修正成功率が最も多かった。内容・構成において、コメントの FB が多数である。2) 全体から見ると、「修正試行」の場合は、新たな誤用が生じたりすることがある。教師による FB に対する「削除」の行動は実際に文章改善の結果である。「放置」の場合は、ほとんど修正の対策が見つからないことである。3) FB がない場合でも、自己修正によって、よくなる事例も悪くなる事例もあることが分かった。

葉 綺晴 (ヨウ キセイ) 「中国語を母語とする日本語学習者の助数詞習得に関する研究 -「つ」・「個」のとらえ方を中心に-」

本研究では、アンケート調査とフォローアップ・インタビューを通して、中国語を母語とする日本語学習者 (Chinese Learners of Japanese, 以下 CLJ) における助数詞「つ」と「個」のとらえ方を考察した。考察の結果、CLJ は「つ」と「個」の用法について十分に把握しておらず、また CLJ における「つ」・「個」で数える物のプロトタイプはいずれも日本語母語話者と異なり、「つ」については「抽象的な事物」、「三次元的な物体」、及び「形がつかみにくい物」に分散しており、「個」で数えるものは、「小さくて丸い三次元的な物体」であることが分かった。また、CLJ が日本語の助数詞を用いる際、母語の量詞“个”(ge4)

はあまり影響を与えておらず、調査協力者である2年生と3年生のCLJにおける「つ」・「個」の各用法についてのとらえ方には、多くの場合、差は見られず、学習時間数の違いは影響を与えていないと考えられることが分かった。

楊 詩雨（ヨウ シウ） 「日本語の口頭発表におけるフィラーに対する評価」

本研究では、日本語の口頭発表においては、日本語母語話者と中国語母語話者が発表者のフィラー使用に対し、どのように評価しているのかを明らかにすることにした。その結果、使用されたフィラーの種類の偏りが強いほど、評価に与える負の影響が強くなることが、日本語母語話者評価者と中国語母語話者評価者に共通していることがわかった。そして、日本語母語話者の評価者は発表者の発音に影響され、フィラーに対する認識度が変わるのに対し、中国語母語話者の評価者は自分の使用経験に影響されて、フィラーに対する認識度が変わるということがわかった。さらに、フィラーが多いと、日本語母語話者の評価者が発話全体に負の評価を与える可能性があり、フィラーが少ないと、中国語母語話者の評価者の評価に負の影響を与えることが明らかになった。なお、中国語母語話者はフィラーを評価する際に母語の影響を受けている。

李 肇馨（リ チョウケイ） 「コミュニケーション能力を向上させるための教室活動の検証—学習者の内省活動に基づいて—」

本研究では、中国の某大学の日本語学科3年生を対象とし、ロールプレイの「セルフ内省」と「ピア内省」の両方の内省活動を取り入れた会話授業をデザイン・実践し、そこから得られたデータの分析によって、内省活動の有効性を検証した。その結果、学習者は「セルフ内省」の際に、ロールプレイでの事実や感情などの「タスクの遂行プロセス」に対する内省観点を一番多く記述したことが分かった。また、「ピア内省」での話し合いによって、内省促進の機会を作り出すことが分かった。そして、授業のアンケートの結果から、学習者は内省活動を通し、自分の不足点や良い点を気づけるなどの認知面でのメリットがあると思ったが、自分の内省の状況を教師からの指摘を期待していることが分かった。

鄭 雨詩（テイ ウシ） 「中国人日本語学習者のあいづちの使用実態の研究 —日本語母語話者の評価から—」

本研究では、中国人上級日本語学習者のあいづちの使用実態に着目し、言語的あいづちと非言語的あいづちの二つの側面から日本語母語話者による評価視点を分析した。まずは、中国人日本語学習者と日本語母語話者の初対面の自由会話の場面を設定し、中国人日本語学習者のあいづちの使用にどのような特徴があるのか、その実態を明らかにした。そして、会話参加者のフォローアップインタビューと第三者である日本語母語話者からの評価視点を分析し、中国人日本語学習者にどのような印象を持つか、どのような点に着目し評価しているのかを明らかにした。最後に、評価の分析結果に基づいて、中国人日本語学習者の

あいづちの不足点を考察し、日本語教育の現場でどのような指導を行うべきか、日本語の会話教育への提言を行った。

ウィモンサラウォン・アパポーン 「日タイ接触場面の日本語会話における言いさし発話の分析」

本研究では、日タイ接触場面の日本語会話における言いさし発話の使用について、会話データとフォローアップ・インタビューを基に分析した。その結果、言いさし発話に【会話の構築】の目的で7つの機能、【人間関係への配慮】の目的で6つの機能が見られた。【会話の構築】の目的で、タイ人日本語学習者は自分の理解を確認したり、言語的な問題の処理をしたりするために言いさし発話を会話ストラテジーとして多用しているが、自信のない気持ちを示したり、相手の発話を促したりするために言いさし発話を使用する傾向が見られなかった。一方、【人間関係への配慮】の目的で、タイ人日本語学習者は相手を傷つけないために言いさし発話を使用しているが、否定的な話のフォローの機能と、相手との距離を短縮させるための肯定的な話の表明、肯定的な話に対する共感の表明、楽しい場づくりの機能を持つ言いさし発話を使用することが難しいということが明らかになった。

折田 知之（オリタ トモユキ） 「日本語表記の多様性—並列表記(振り仮名)による表現性を中心に—」

本研究は、振り仮名を用いた表記(並列表記)から、多様な日本語表記において「表現性」をゆたかなものに行っているものの特徴を明らかにすることを目的とした。まず、研究の背景として、文字の本来の役割を確認した上で、日本語表記がなぜ多様になったのか、どのように多様なかを明らかにした。次に、並表記主体以外(＝読み手)の立場で、主従関係以外の観点から並列表記の用例を観察することを課題として設定し、「青空文庫」の文学作品からその用例を収集した。考察の方法としては、最初に文字体系の組み合わせによる用例の分類を試みた。次に、並列表記において仮名表記語が読みを示していると判断できるかどうかで機能が大きく変わることを確認した。特に仮名表記語が読みを示しているとは限らない場合、i 異なる語種による表現の重層化、ii 発話・発音、iii 対象の特定化、iv 対訳といった役割を果たしていることを述べた。

井澤 弘子（イザワ ヒロコ） 「へノ格についての一考察」

「京都へ移動する。」「京都に移動する。」では格助詞「へ」と「に」の違いは殆どない。しかし、「にの」の形は存在しないので、名詞化すれば共に「京都への移動」となる。このように、「への」で結びつく連体修飾の関係をへノ格と呼ぶ。へノ格は、単に「へ」と「の」が結びついたものではなく、連用格のへ格よりも広い領域を担っている。へ格の動詞文の全てだけでなく、ニ格の多くとヲ格の一部も担っている。従来、思考・判断・感情を表すヲ格の動詞文については言及されてきたが、それ以外の場合でも、例えば「難民を支援す

る。」が「難民への支援」にもなることに注目した。また、「退院後の生活環境の変化への準備」は「退院後の環境変化を準備する」とはいえず、「退院後の環境変化にむけて準備する」となるように、ヘノ格の領域は、格助詞の範疇を越えて、複合助詞の範囲にまで広がっているといえることについて、論じた。

小林 ゆかり（コバヤシ ユカリ） 「格助詞と接続助詞の連続性―「のが」を中心に―」

本研究では、格助詞から接続助詞への連続性を考察することを目的として、名詞性を持つ「の」+格助詞「が」でありながら、「のが」で一つの接続助詞のように捉えられる以下のような「接続助詞的な「のが」」の節の文を考察した。

(1) 昨日は晴れていたのが、今日は大雨になった。(作例)

CD-ROM 版『新潮文庫の 100 冊』中の、接続助詞性の程度の異なる 232 例の「のが」節文を対象とし、形態的特徴、主節述語の特徴、構文的特徴、意味的特徴の観点から分析した。

調査の中で「のが」節文の主節述語動詞に無意志の自動詞が現れやすいという特徴が観察されたことから、文全体で主体そのものの無意志的な動きや変化を表す傾向があると考え、それに加えて、「のが」前後の独立や、「のが」節と主節とで時間の前後関係が現れること、変化の意味を含む主節述語が現れることが関係し合うことで「のが」が接続助詞に近接し、文全体で対比関係や単純接続を表すようになると考察した。

李 曉曄（リ ギョウカ） 「中国における日本語学習者の動機づけの変化とその要因―自己決定理論の視点から―」

本研究は中国人日本語学習者を対象に、日本語学習における 3 つの心理的欲求の充足程度と動機づけについて、調査し、動機づけの変化とその要因を検討した。

実際に得られた調査データに基づき、考察したところ、以下のことがわかった。

(1) 中国人日本語学習者は自律性、有能性、関係性の 3 つの要因を互いに関連させ合いながら、日本語学習への心理的欲求を満たす。

(2) 中国人日本語学習者の動機づけは自己決定理論で想定されるように、無動機、外的調整、取り入りの調整、同一視的調整、内発的動機づけという順に、連続体を構成している。

(3) 全体的な傾向の視点から見ると、中国人日本語学習者の日本語学習において、3 つの心理的欲求がそれぞれ高まるにつれて各動機づけタイプは連続体を構成している。

(4) 個人差の視点から見ると、3 つの心理的欲求、自律性欲求、有能性欲求と関係性欲求のいずれも、日本語学習の動機づけの高さと強くかかわっている。

中村 彩希（ナカムラ サキ） 「留学生にとっての「居場所」とは-国費外国人留学生へのインタビュー調査から-」

本研究では、国費外国人留学生の生活を居場所という観点から捉え直し、その実態を明らかにすることを目的に、都内の大学院に在籍する国費研究留学生 4 名を対象にライフス

トリーインタビューを実施した。本研究の結果、居場所は、「a.精神的な安定を得られる居場所」「b.自分らしくいられる居場所」「c.活躍できる居場所」「d.自分の興味を共有できる居場所」「e.母国の文化を体感できる居場所」「f.勉強のための居場所」「g.成長できる居場所」という7種類に大別でき、調査協力者4名は共通して、居場所を「精神的な安定を得られる場やコミュニティ」と捉えていることが明らかになった。さらに、日本と母国に複数の居場所が存在することや一人という個人やSNSが居場所になることも明らかになった。また、居場所は、国費研究留学生の精神的な安定を支えるとともに、適当な居場所があることは、留学生活への満足度に何らかの影響を与えうることが示唆された。

金 蝶（キン チョウ） 「日本古典詩歌における植物表現の比較文学的研究—いわゆる四君子の表現を中心に—」

「四君子」である梅、蘭、竹、菊は中国人が好む植物群のひとつであり、中国文化にて重要な地位を占めている。先秦時代から文人たちに注目されるようになり、中国古典詩歌における典型的なイメージとして扱われる。その一方で「四君子」は日本の和歌で歌人たちに好まれてよく詠まれた題材としての一面も存在する。しかし、恋歌にて用いられた梅、蘭、竹、菊のイメージは漢詩文のイメージとは違ったものであった。そこで恋歌における梅、蘭、竹、菊のイメージは漢詩文の影響をどのように受容し、さらにはそれがどのように変容していったのかという問題点として扱い、梅、蘭、竹、菊のイメージの経緯を植物毎に考察する。恋歌における「四君子」の梅、蘭、竹、菊はそれぞれ独自した傾向にあることから考えられ、このような傾向はおそらく、日本語という言語的な特性、つまり、歌の修辞法としての「縁語」と「掛詞」により導き出された趣向であると考えられる。

姜 可迪（キョウ カテキ） 「源氏物語論—和漢比較文学的な視野による女君の死と子孫への継承の考察」

源氏物語には多くの女性が登場し、彼女らのあり方を描く場面の中で、人生の結末である死とその中に含まれた深い意味が非常に重要な研究課題である。本論では、夕顔—玉鬘母子を中心として平安朝の女君の死後に残された子どもに注目し、和漢比較文学的な視野によって母の死と子どもへの継承を考察した。夕顔—玉鬘母子の継承と対照的に、唐代伝奇における崔鶯鶯及び任氏の子どもは全く描かれていない。それは平安朝の日本の公家社会における「子女入内」という意識から女君への重視と、唐代の中国の儒家社会における「男性服従」という思想から女性への軽視に帰因すると考えた。公家社会で、子女入内によって実権を握るために女君及びその子どもまでの力が不可欠である一方、儒家社会で、女性が男性の機嫌を取る物とされ、あまりに力を発揮する余地がないからである。最後に平安時代に子どもが母とともに家族を振興するという責任を担っていることを論証した。

二階 健次（ニカイ ケンジ） 「雲玉和歌抄とその時代； 人物と詞書にみる中世和歌の一齣」

『雲玉和歌抄』は永正十一年（一五一四）に下総国の領主・千葉勝胤の要請で衲叟馴窓という出自不明の歌僧によって編纂された私家集である。全五八一首を収録し、その詞書から当時東国に流布していた説話や寺社縁起を基にした作歌活動として注目される。そこで抄の舞台となったあづまの諸問題、編者である衲叟馴窓の出自問題、さらに道灌謀殺を巡る時局の展開から勝胤の佐倉歌壇の活動を調査し、武士がなぜ歌を詠むのかを考察した。そこには東国の覇者千葉宗家が平将門に由来する妙見神を一族の氏神としたこと、古河公方を巡る香取内海（印旛沼）の水運拠点の獲得を巡る争いを背景としたこと、さらに抄に登場した東常縁、太田道灌、木戸孝範等の武家歌人は下総千葉氏の敵方の武将であったが、千葉氏内訌が齎した武蔵千葉氏と対抗するため、下総千葉氏の結束を和歌によって図ろうとした勝胤の意図等に注目して論じた。付論に、抄の「序」の訳注を試みた。

2018 年度卒業論文・卒業研究題目
List of B.A. Theses/Projects 2018-2019

氏 名	指 導 教 員	論 文 題 目	備 考
言語文化学部 言語・情報コース			
尾 崎 菜 南	風間 伸次郎	ベトナム語の動詞連続について―「付帯」表現における動詞句入れ替えの許容について―	*ベトナム語
勝 又 実 紀	風間 伸次郎	フランス語における quand 節の半過去について―コーパス調査に基づく結果から―	*フランス語
川 嶋 圭	風間 伸次郎	ハニ語における形容詞の連体修飾について	*中国語
紅 林 初 音	風間 伸次郎	テモラウのトルコ語における対応形式の分析	*
シ エ ン	風間 伸次郎	中国語の二音節動名兼類語について	*
高 橋 新	風間 伸次郎	山梨県国中方言における動詞接辞「サル」について	*
高 橋 怜 那	風間 伸次郎	宮崎県日向方言におけるコッセンについて	*ラオス語
高 松 良 弥	風間 伸次郎	宮城県仙台方言のテンス・アスペクトと体験性	*英語
遠 山 綾 香	風間 伸次郎	イタリア語の前置詞句における冠詞の有無について	*イタリア語
内 藤 遼	風間 伸次郎	ウズベク語における後置詞 bilan を用いた時を表す従属節について	*ロシア語
中 村 真 子	風間 伸次郎	接尾辞「ばい」の用法の拡大について	*英語
西 村 有 美 子	風間 伸次郎	ノルウェー語における性・数の不一致について	*英語
服 部 優 花	風間 伸次郎	テ形補助動詞の相互承接可能性	*
原 明 海	風間 伸次郎	サラール語の所有表現について	*
松 前 美 紗 都	風間 伸次郎	主題提示『って』の許容度について	*英語
了 源 康 平	風間 伸次郎	アラビア語カイロ方言の動詞 Sirif の現在テンスにおける用法	*アラビア語
青 木 夏 希	早津 恵美子	広告表現における日本語オノマトペについて―鉄道広告における日本語オノマトペの使用を対象として―	*
アピボンチャラン ア ッ ト	早津 恵美子	『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』における条件文の使用実態	*
オ ウ シ メ イ	早津 恵美子	オタク構文について言語学的研究	*
加 藤 萌	早津 恵美子	役割語としての自称詞・他称詞―漫画作品を対象に―	*
ゲン イ リ ユ ウ	早津 恵美子	日中同形異義語の比較―誤用分析―	*
坂 下 和 哉	早津 恵美子	否定の意味の接頭辞「無」「未」「非」「不」「反」「アンチ」の意味・用法の分析	*

言語文化学部 グローバルコミュニケーションコース			
内 海 菜 生	阿 部 新	ヨルダンにおけるアラビア語母語話者の日本語学習ビ リーフ	*アラビア語
小 竹 茜	阿 部 新	日本語学習者のフィラー使用の有無が母語話者に与え る印象	*
中 原 歩	阿 部 新	地域日本語教室における今後の課題—東京都江東区の 地域日本語教室における取り組みを例に—	*イタリア語
ハム スンフン	阿 部 新	韓国語母語話者向けの日本語教育—漢語サ変動詞を中 心に—	*
吉 田 美 恵	阿 部 新	インドネシア・ジャワ島内 5 州における高校日本語教 師のビリーフ分析	*朝鮮語
ア シ フ ァ ー ラ ー マ ー フ ェ ル ヤ テ ィ	海 野 多 枝	インドネシアにおける日本語学習者のビリーフ調査	*
天 野 優 里	海 野 多 枝	フランス語を母語とする日本語学習者の日本語の指示 詞の習得に関する研究	*フランス語
遠 藤 楓 子	海 野 多 枝	フィリピン人日本語学習者の漢字学習に対するビリー フとストラテジー	*フィリピン語
小 倉 摩 椰	海 野 多 枝	ヨルダン・ハシミテ王国における日本語学習者の学習 意欲	*アラビア語
茂 野 葉 月	海 野 多 枝	複数留学が与える日本語学習意欲の変化—カザフ人日 本語学習者を対象に—	*ロシア語
福 田 一 葉	海 野 多 枝	ベンガル語母語話者の日本語学習を助ける日本語とベ ンガル語の文法的共通点について	*ベンガル語
宮 下 優 奈	海 野 多 枝	JSL 児童のアイデンティティの実態	*アラビア語
ラ イ リ ア ヌ ー ル サ フ ィ ト リ	海 野 多 枝	インドネシア人日本語上級者のライフストーリーから 見たインドネシア人日本語学習者における学習動機に ついて	*

言語文化学部 総合文化コース				
駒 林 風 真	柴 田 勝 二	詩集『無題』		*ロシア語
佐々木 美 聡	柴 田 勝 二	歌集『おやすみを言う前に』		*ポーランド語
島 浦 凌 栄	柴 田 勝 二	小説『思う』		*チェコ語
白 木 知 美	柴 田 勝 二	安部公房作品と実存主義の関係性		*ロシア語
露 木 桃 子	柴 田 勝 二	村上春樹作品における中国と東アジア		*ロシア語
中 村 千 沙 都	柴 田 勝 二	小川洋子作品における記憶と身体について		*ドイツ語
根 本 真 吾	柴 田 勝 二	輸入文化としての日本のヒップホップ		*英語
国際社会学部 地域社会研究コース				
有 村 将 大	吉 田 ゆり子	近世木下河岸を巡る河岸問屋と村との利害対立—寛政 2 年の村方騒動を事例として—		*中国語
カ ゼ ン	吉 田 ゆり子	近代日本の産業—マッチ産業の展開と海外貿易—		*
加 藤 雅 之	吉 田 ゆり子	西師意「治水論」にみる近世日本の治水策と西欧的森林管理制度の融合		*中国語
葛 谷 友 恵	吉 田 ゆり子	幕末における加納藩和傘の生産と流通—専売制の導入による変化に着目して—		*英語
佐 藤 あかり	吉 田 ゆり子	弘化四年善光寺地震の災害と現代—新潟県中越地震との比較において—		*ヒンディー語
花 島 志 歩	吉 田 ゆり子	近世淀川舟運における柱本煮売茶船の実態と独占営業権をめぐる対立		*英語
八 木 みずき	吉 田 ゆり子	飯盛女と飯盛旅籠屋—東海道藤沢宿と川崎宿を事例として—		*ベンガル語
マ ル コ モンテネグロ	吉 田 ゆり子	ドン・ロドリゴ日本見聞録と宗教的な観点から見た日西通商関係		
イ ミンジュン	米 谷 匡 史	韓国と沖縄におけるキリスト教の社会運動—反独裁民主化と沖縄人権運動のパラダイムについて—		*
宇 佐 美 希	米 谷 匡 史	なぜ撫順戦犯管理所は宥和的な戦犯処理を行ったのか—国内要因・国際要因両方の視点から—		*中国語
蝦 名 康 平	米 谷 匡 史	90 年代に見る中国と台湾の対日感情の差異の形成の過程		*中国語
加 藤 理 恵	米 谷 匡 史	日本の帝国意識の考察—朝鮮学校無償化問題と脱帝国化の課題について—		*朝鮮語

キン カイホウ	米谷 匡史	中国朝鮮族ナショナル・アイデンティティ、エスニック・アイデンティティ、トランスナショナル・エスニック・アイデンティティ再考—中国朝鮮族出稼ぎ労働者を対象として—	*
ゼン キョウコウ	米谷 匡史	中国朝鮮族の人口変移と民族教育—1990 年代以降の人口分散化の視点から—	*
ゾ インソン	米谷 匡史	ガラパゴス化する日本の ICT 産業とその要因	
野坂 妃菜子	米谷 匡史	外国人受け入れの変遷と日本の姿勢	*
吉田 流加	米谷 匡史	アイヌ文化の変遷とアイデンティティ	

*については、p.113 以降に卒業論文要旨を掲載

・備考欄の言語名は所属する専攻語を表す（空欄の場合は日本課程日本語専攻の学生）

2018 年度卒業論文・卒業研究要旨
Abstracts of B.A. Theses/Projects 2018-2019

尾崎 菜南（オザキ ナナ）「ベトナム語の動詞連続について―「付帯」表現における動詞句入れ替えの許容について―」

ベトナム語には動詞連続という現象が存在する。本稿はベトナム語の動詞連続の付帯表現に関する先行研究の清水(2017)の主張の正誤の判断・考察を目的とした。インフォーマントに VP1-VP2・VP2-VP1 の文を提示し、VP2-VP1 が言えるかどうかを判断していただく 2 つの調査を行い、調査結果をもとに、動詞句入れ替えが許容される場合・許容されない場合の VP1, VP2 の動詞の特徴を考察した。更に、調査 1・調査 2 を経て疑問に感じた点を調べる追加調査も行った。

勝又 実紀（カツマタ ミキ）「フランス語における quand 節の半過去について―コーパス調査に基づく結果から―」

フランス語の時を表す接続詞 quand が導く従属節には未完了や継続を表す半過去時制が共起しにくいとされているが、それらは一定の規則に基づいて容認される。本稿はその規則や傾向を、コーパス調査から得られた quand + 半過去の用例の考察により明らかにすることを目指した。Vendler (1967)の動詞分類、主節に対する位置、主節の時制という観点から分析を行い、この容認度には習慣・反復との結びつきが大きく関わっているということが分かった。

川嶋 圭（カワシマ ケイ）「ハニ語における形容詞の連体修飾について」

本稿はハニ語の形容詞が連体修飾の用法で用いられる際の形態的、統語的特徴を記述した。インフォーマントへのエリシテーションを通し、形容詞が名詞の前後どちらに現れ得るかの条件と、指示詞や数詞等の他要素を含む名詞句を形成する方法を調査した。それにより、焦点が当たる要素が先に現れる語順をとる傾向があること、形容詞の位置に関わらず名詞と形容詞の外側に数詞、類別詞、指示代名詞が位置することが明らかになった。

紅林 初音（クレバヤシ ハツネ）「テモラウのトルコ語における対応形式の分析」

日本語のテモラウに対応するトルコ語について、どのような形式が用いられるか分析した。分析にはアックシュ(2008)の「与え手主語」「受け手主語」を用いた。調査には日本語およびトルコ語の文学作品を使用した。まず、テモラウが他の形式と結びついた表現ごとにグループ分けをし考察を行った。さらに用例を文法範疇で整理し考察を行った。トルコ語対応形式に現れる統語論的特徴には傾向があることを確認することができた。

施 エン（シ エン）「中国語の二音節動名兼類語について」

本稿は、中国語の二音節動名兼類語について考察した。まず胡明扬(1996 : 272-285)のリストから他動性の高い語を選定し、コーパスにより用例を収集し、語の使用状況を調査した。これによって二音節動名兼類語とそうでない語の使用傾向を明らかにした。また、語形成の視点から考察を行い、語の内部関係が補足関係である二音節動詞は動名兼類語になりにくいということが判明した。

高橋 新（タカハシ アラタ）「山梨県国中方言における動詞接辞「サル」について」

本稿は、山梨県の西部で話されている国中（くになか）方言における、動詞接辞「サル」について扱うものである。インフォーマントから当該形式の用例を得て、それを他の地域の諸方言における自発形式と比較し、考察を試みた。その結果、形態音韻的特徴および意味・用法上の特徴、共起する動詞の特徴について、いくつかの知見を得るに至った。併せて、当該形式の研究に当たって今後取り組むべき課題を洗い出した。

高橋 怜那（タカハシ レナ）「宮崎県日向方言におけるコッセンについて」

1990年代初めに、宮崎県宮崎市を中心として、相手に同意や確認を求める文末表現「コッセン」が使われ始めた。ちょうど共通語の「～じゃない?」「よね」に当たり、上昇調のイントネーションをとる。本稿では、この「コッセン」の現在の使用実態及び他の要素との共起制限を明らかにすることを目的としている。調査方法としてアンケート調査ならびにエリシテーション調査を行い、考察した。

高松 良弥（タカマツ リョウヤ）「宮城県仙台方言のテンス・アスペクトと体験性」

本稿は、宮城県仙台方言におけるタ形、タッタ形で表されるテンス、アスペクトと体験性について記述した。まず談話資料よりテンス・アスペクト表現についての用例を収集し、分析した。その結果を踏まえた上で、先行研究の枠組みに従い、エリシテーション調査をし、分析を行った。それらによって、タ形、タッタ形の表す意味範囲について、先行研究との一致点及び相違点を明らかにすることができた。

遠山 綾香（トオヤマ アヤカ）「イタリア語の前置詞句における冠詞の有無について」

本稿ではイタリア語の前置詞句においてどのような場合に、前置詞句の補語となっている名詞が無冠詞になるのかについて考察を行った。まずコーパスを用いて用例を収集し、前置詞ごとの無冠詞の用例の取りやすさの違いを分析した。次に前置詞句の補語に注目し、名詞の性や意味が無冠詞の生起に関係しているかを調査した。最後に前置詞句の被修飾部に着目し、どのような要素と結びついている場合に無冠詞になりやすいのかを考察した。

内藤 遼（ナイトウ リョウ）「ウズベク語における後置詞 bilan を用いた時を表す従属節について」

本稿ではウズベク語の後置詞 bilan による時を表す従属節形成の条件について考察を行った。ニュースサイト上での文例調査と若年層母語話者への聞き取り調査を行い、時を表す従属節では動名詞接辞 -sh と bilan による形が多く用いられ、形動詞接辞 -gan と bilan による形は譲歩を表す機能として用いられる傾向にあることを明らかにした。加えて、動詞が持つ限界性が -sh bilan による時を表す従属節の使用可否を分けている可能性を考察した。

中村 真子（ナカムラ マコ）「接尾辞「ばい」の用法の拡大について」

卒業論文では接尾辞「ばい」の用法の拡大及び意味拡張について考察を行った。コーパスと Twitter を用いて「ばい」が接続する用例を収集し、調査・分析を行った。「ばい」の接続する要素は大きく名詞形接続と終止形接続の 2 つに分けられることを示し、新用法である終止形接続がかなり定着していることを明らかにした。さらに、単独用法に関して「ばい」の自立性・単語度が高まっている可能性を指摘した。

西村 有美子（ニシムラ ユミコ）「ノルウェー語における性・数の不一致について」

本稿はノルウェー語の、主語と性・数が一致しない形容詞述語が現れる文について考察を行った。特に述部の形容詞が中性名詞単数形であるものを調査の対象とした。まずコーパスを用いて動詞がコピュラでありかつ形容詞述語が中性名詞単数形である文を検索し、そこから主語が男性名詞または女性名詞である文を手作業で抽出した。そして、先行研究が用いた「一般性」「主観性」という観点から、今回観察された文を分析した。

服部 優花（ハットリ ユカ）「テ形補助動詞の相互承接可能性」

本稿ではテ形補助動詞「テアル」「テイル」「テイク」「テクル」「テオク」「テミル」「テシマウ」「テヤル」「テモラウ」「テクレル」「テミセル」「テスム」「テスマス」「テヨコス」「テマワル」「テノケル」「テカカル」が相互に承接する可能性をコーパス調査により明らかにした。予備調査として日本人母語話者にアンケート調査を実施後、コーパスで用例を収集し分析した。「テスム」の特殊性についてもコーパス調査を行った。

原 明海（ハラ アキミ）「サラール語の所有表現について」

本稿はサラール語の限定所有を構成する属格と所有人称接辞が付加または省略される条件について考察を行った。まず、コーパスから用例を抽出し、人称代名詞の語や、漢語由来の語について、属格と所有人称接辞の出現割合を調査し、その相関を明確にした。次に、エリシテーション調査を通じて名詞の意味関係との限定所有の構造の相関を調査し、属格と所有人称接辞の出現傾向を明らかにした。

松前 美紗都 (マツマエ ミサト) 「主題提示『って』の許容度について」

本稿では、「って」が持つ用法のうち、主題提示用法に注目し、大学生を対象に許容度の調査を行った。「って」の許容度の調査は、藤村(1993)が 1992 年に、朴(2006)が 2003 年に同じアンケートを用いて行っている。本稿は、2018 年に再度藤村(1993)と朴(2006)が使用したアンケートを用いた調査を行い、許容度の変化を確認した。加えて、文脈を指定したアンケートを新たに作成して調査を行い、「って」の主題提示用法についてより深い考察を試みた。

了源 康平 (リョウゲン コウヘイ) 「アラビア語カイロ方言の動詞 *ʕirif* の現在テンスにおける用法」

本稿は、アラビア語カイロ方言の動詞 *ʕirif*「知る」の能動分詞形 *ʕaarif* と Ø- 接頭辞活用形 *yiʕraf* の使い分けについて考察した。カイロ方言で書かれた小説中から *ʕirif* を含む文を抜き出し、*ʕaarif* を *yiʕraf* に置換することないしその逆が可能であることを母語話者に質問するアンケート調査を行った。*ʕaarif* の方が *ʕinn* の名詞節と共起しやすい傾向にある一方、*yiʕraf* はこれらから行うことについての可能を表す際に用いられやすいことが分かった。

青木 夏希 (アオキ ナツキ) 「広告表現における日本語オノマトペについて—鉄道広告における日本語オノマトペの使用を対象として—」

鉄道広告においてオノマトペが用いられている広告表現を収集し「語基・語形」「統語的特徴」「広告内言語情報」「業種」の四観点から分析を行った。語形について、語基一音節のオノマトペにおいて語末に促音を用いている例が多く、時間短縮効果を伝えるためであると考えられる。また調査月によって多用されているオノマトペに偏りがあり、これは年間の気候によって求められる商品の効果や目的地の魅力が異なるためだと考えられる。

アピボンチャラーン・アット 『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』における条件文の使用実態」

この論文は、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス(I-JAS)」による調査を通して、日本語学習者のデータには、日本語母語話者のデータと比べてどのような条件文の使い方の違いが見られるのかを調べるというものである。その結果、学習者は、様々な用法を持つ「たら」を母語話者より多く使っていることが分かり、学習者の条件文の使用には、時制に関する問題や、「テ形」や「ながら」などの関連のある形式に関する問題が観察された。

王 詩銘 (オウ シメイ) 「オタク構文について言語学的研究」

本稿では「オタク構文」の造語法の特徴と動機について考察する。ネット社会で使われている「オタク構文」は日常生活で使われている日本語との間には大きな乖離が生じてい

と感じた。「オタク構文」が積極的に使われている二つの動画を対象にして、用例を抽出し、その造語法の特徴を日本語学的に分析し、その上でどのような動機に基づいて作られたのを考察する。通信機器の使用が造語法に大きな影響を与えていることがわかった。

加藤 萌 (カトウ モエ)「役割語としての自称詞・他称詞—漫画作品を対象に—」

本稿は、日本で育った日本語母語話者が役割語の一端を認識すること、そして日本語学習者が役割語を理解する一助となることを目的とした論文である。年齢、性別、立場などが異なる人物が登場する漫画を 3 種類選別し、そこから手作業で自称詞・他称詞を抽出した。それぞれの場面や発話の相手を分析し、1 人の人物が自称詞・他称詞を使い分けるのはどういった時であるかをまとめた。

阮 以龍 (ゲン イリュウ)「日中同形異義語の比較—誤用分析—」

先行研究から日中同形異義語の分析をまとめた上で、『覚えておきたい日中同形異義語 300』に収録されている単語を分類し、専攻論文で述べられた構造、品詞、文法などの面において、違いが見られるかを分析し、まとめる。次に、それぞれの単語はコーパスで例文を収集し、それらの単語がどのように使われているかを考察する。

坂下 和哉 (サカシタ カズヤ)「否定の意味の接頭辞「無」「未」「非」「不」「反」「アンチ」の意味・用法の分析」

否定の意味を持つ接頭辞の意味・用法を後続する語に注意して分析している。どれも否定の意味を持っているという共通点があるため、特にそれらの違いに注目している。結果、生産性の面でそれぞれに違いを見出だすことができ、意味の面でもそれぞれが接続する熟語に注目することで違いを見つけることができた。

内海 菜生 (ウチウミ ナオ)「ヨルダンにおけるアラビア語母語話者の日本語学習ビリーフ」

7 領域 61 項目からなる質問紙調査と記述式の追加調査を行い、ヨルダンの日本語学習者(アラビア語母語話者)のビリーフの特徴と、ビリーフを持つに至った要因について考察した。「自信」、「積極的な態度と好奇心」など調査で明らかになったビリーフの特徴とヨルダンの現状を踏まえた上で、今後ヨルダンの日本語教育では、教師以外の日本人と交流する機会の創出と、情報共有の仕組みの構築に取り組むべきだと指摘した。

小竹 茜 (コタケ アカネ)「日本語学習者のフィラー使用の有無が母語話者に与える印象」

日本語学習者の発話におけるフィラー使用の有無が聞き手である母語話者に与える印象を探るため、学習者の発話を録音した音声データをもとに、各発話への印象について日本語母語話者の大学生を対象としてアンケート調査とインタビュー調査を行った。その結果、

学習者のフィラー使用は「自信がありそうだ」「日本語を話すことに慣れている」「間のとり方がうまい」という印象を聞き手である母語話者に与えることが明らかになった。

中原 歩（ナカハラ アユミ）「地域日本語教室における今後の課題—東京都江東区の地域日本語教室における取り組みを例に—」

本稿では江東区の地域日本語教室で活動しているボランティアに対するアンケート調査と授業見学を通じ、学習者が快適に生活していけるようにする為にボランティアが実践すべき行動や考え方について論じた。調査結果から、①「文法」指導と「会話」指導を同時並行しながら実生活を意識した授業を行うこと、②学習者と対等な立場で対話を行い、一人一人としっかり向き合うことがボランティアに求められる行動であると結論づけた。

成 勝勲（ハム スンフン）「韓国語母語話者向けの日本語教育—漢語サ変動詞を中心に—」

日本語において漢語サ変動詞の使用は、韓国人がよく間違える文法項目の一つとして指摘されてきたが、現在韓国ではその指導案が確立されていない。このような問題を解決するため、対照研究、コーパス分析、教科書分析、学習者に対してテスト及び文法レジュメ提示、インタビュー調査を行った。結果として、漢語サ変動詞は、上級日本語学習者にも習得が難しく、漢語サ変動詞の詳細な説明、膨大な例文が必要だということが分かった。

吉田 美恵（ヨシダ ミエ）「インドネシア・ジャワ島内 5 州における高校日本語教師のビリーフ分析」

インドネシアの高校日本語教育において、カリキュラム改訂や国際交流基金による新たな教科書の開発などの流れを受けて、ジャワ島内 5 州の高校日本語教師を対象にビリーフ調査を行った。その結果、現在目指されている学習者中心の学びを肯定的に捉えていることが明らかになった。しかし同時に従来の文法重視の姿勢も強く、カリキュラムの具体的な教授活動への反映には至っていなかった。今後は教師研修の更なる充実などが望まれる。

アシファー・ラーマー・フェルヤティ「インドネシアにおける日本語学習者のビリーフ調査」

本論文はインドネシア人日本語学習者を対象としたビリーフ調査の報告である。対象者は 2 年間インドネシアの学校で日本語を第二外国語として学んできた高校生で、「言語系」、「理科系」、「社会系」というどちらかの専攻に所属している生徒である。調査は佐藤(2007)による BALLI 質問紙を自ら翻訳したインドネシア語版を用いて行った。BALLI 質問紙は 7 領域 67 項目から成り立っている。

天野 優里 (アマノ ユリ) 「フランス語を母語とする日本語学習者の日本語の指示詞の習得に関する研究」

本研究では、フランス語を母語とする日本語学習者に対して 30 問の選択問題を実施し、日本語の指示詞コ・ソ・アの習得状況や習得過程についての考察を行った。フランス語母語話者 14 名を対象とし、3 つの級に分け正答率を比較し、習得過程を図式化した。指示詞の用法毎の正答率は先行研究と一致しないものもあり、級が上がるにつれて右上がりにならないグラフも見られた。中間言語体系は習得段階に応じて可変的であることが示された。

遠藤 楓子 (エンドウ フウコ) 「フィリピン人日本語学習者の漢字学習に対するビリーフとストラテジー」

本稿では、漢字学習に対するビリーフとストラテジーに焦点を当て、フィリピン人日本語学習者の特徴を分析した。また、留学経験者と未経験者を比較した。結果、フィリピン人日本語学習者は漢字に対して負のイメージを抱いてはいないことが分かった。しかし、漢字学習が単なる暗記作業となってしまうと感じているという結果から、漢字学習をより実践に結びつき、学習者の関心を引き出すものにするための案を提示した。

小倉 摩椰 (オグラ マヤ) 「ヨルダン・ハシミテ王国における日本語学習者の学習意欲」

ヨルダン王国という日本語学習環境が整っていない環境での学習意欲の向上・低下について研究をしました。

茂野 葉月 (シゲノ ハヅキ) 「複数留学が与える日本語学習意欲の変化—カザフ人日本語学習者を対象に—」

本稿では、カザフ人日本語学習者を対象に【留学前】【1 回目留学中】【1 回目留学後】【2 回目留学中】の 4 つの期間における学習意欲の変化、またその意欲向上・低下要因を動機構成概念の 7 つの局面を用いて考察した。結果、4 つの期間で学習意欲は変動し、留学が学習意欲の向上・低下要因に影響を与えていることが明らかになった。ここから、異文化適応モデルも 1 期間だけでなく、繰り返しという観点で考える必要があるとする。

福田 一葉 (フクダ ヒトハ) 「ベンガル語母語話者の日本語学習を助ける日本語とベンガル語の文法的共通点について」

バングラデシュは親日国として知られ、日本語学習に熱心な国のひとつである。その要因のひとつとして、日本語とベンガル語の文法的共通点が指摘できる。例えば「て形」はそのひとつである。そうした具体例のひとつとして、自身がバングラデシュ出身の日本語学習経験者に行ったインタビューの中に現れた「日本語の学習がしやすかった点」を見ていく。また、バングラデシュの日本語教育などについて得られた情報を整理する。

宮下 優奈（ミヤシタ ユウナ）「JSL 児童のアイデンティティの実態」

小中学生対象の日本語教室でボランティアをする中で、様々な背景を持ち第二言語として日本語を学ぶ子どもたちのアイデンティティに興味を持った。そこでインタビューをして彼らを取り巻く環境を明らかにし、日本の生活に適応していく過程でのアイデンティティの変化やその構成要素について調査した。その結果、母語が同じ日本語指導者や素の自分を受け入れてくれる友達の存在が、アイデンティティの構築に影響を与えるとわかった。

ライリア ヌール サフィトリ「インドネシア人日本語上級者のライフストーリーから見たインドネシア人日本語学習者における学習動機について」

未だに少ないインドネシア人日本語上級者にあえて焦点を当て、どのような学習動機で上級者まで勉強を励んでいるかを調べるのが調査目的である。今回は、違う環境で暮らしている 2 人のインドネシア人日本語上級者を対象に日本語学習にまつわるライフストーリーをインタビューした。そこで学習者がどのような学習動機を持って上級者まで辿り着いたか、そしてどのような環境で、どのような学習過程をおくっているかをインタビューから分析し、解説する。

駒林 風真（コバヤシ フウマ）「詩集『無題』」

自分は今回、研究として詩集の制作を行った。詩を書くにあたって、事前に 2 つのコンセプトを決め、それに基づいて作成した。1 つ目のコンセプト(memoria)は日常性が強い事柄についてを題材にしたものや、自身の思想を構成の中心とし、尚且つ主体性が強いものであり、2 つ目のコンセプト(cosmos)は、人間や自然など題材の範疇が広いもの、或いは自身の主体性が薄いものである。

佐々木 美聡（ささき みさと）「歌集『おやすみを言う前に』」

95 首の自作短歌を、自ら撮影の写真と共に収録した作品集。ジャンルや題材の異なる 10 章から成る。内容として、既存の名歌とされる短歌を援用したものや、対句や倒置といった技法を用いたもの、古語で作成したものなどがあり、様々な作品構成になっている。一冊を通し、豊かな言語表現の可能性を探求すると同時に、現代短歌における問題点とされる個人主義や心情偏重の傾向を克服することを目指した。

島浦 凌栄（しまうら りょうえい）『『思う』』

上記のタイトルで小説を製作した。技術発展が進んだ近未来を舞台とし、そこでは人間と機械人間が共存する。機械人間は本物の人間と同じような見た目と知能を持ち、人間に従える存在だ。主人公の〈僕〉はそんな機械人間の開発関係の組織に属しており、組織の末端で働いている。彼は今ある生活に満足していて調和のとれた日常を送っていたが、母

が誘拐された日を境に彼の生活は一変する。

白木 知美（しらき ともみ）「安部公房作品と実存主義の関係性」

安部公房作品と実存主義の関係性について論じた。安部公房が実存主義に影響を受けたとされる作者の背景（満州体験など）を考察し、その上で、特に作品に大きな影響を与えたとされるハイデッガーを中心に、実存主義の思考を捉えた。そして、特に実存主義の影響が強いとされる初期～中期作品である、「S・カルマ氏の犯罪」「赤い繭」「砂の女」「他人の顔」に、ハイデッガー的実存主義の当てはめ、先行論文と比較し、作品考察をした。

露木 桃子（つゆき ももこ）「村上春樹作品における中国と東アジア」

本論文は、村上春樹作品における「中国」「東アジア」というモチーフに着目し、それらが作品内においてどのような役割を担っているのかを考察するものである。初期作品『中国行きのスロウ・ボート』から最新長編『騎士団長殺し』まで、年代順に作品を分析する。また、村上に多大な影響を与えた彼の父親についても言及し、同時代の作家との比較も行い、村上の中国や東アジアへの思いがどのように生まれたのかも論じる。

中村 千沙都（なかむら ちさと）「小川洋子作品における記憶と身体について」

小川洋子作品における記憶と身体について論じた。小川洋子と金光教の関係や死者の声の取り次ぎを踏まえ、作品において記憶と身体がそれぞれどのように描かれているのかを考察した。『沈黙博物館』、『薬指の標本』、『完璧な病室』、『密やかな結晶』等の作品を取り上げ、記憶と身体の関係性や「変らないモノへの安心感」という価値観についても言及した。

根本 真吾（ねもと しんご）「輸入文化としての日本のヒップホップ」

今現在世界で最も売れており、日本でも盛り上がりを見せているヒップホップはアメリカのブロンクスで黒人などの社会的マイノリティが自らの権利などの主張の手段として音楽やダンス、グラフィティを始めたのが起源である複合文化である。それは日本に輸入され、日本固有の不良文化などと交わりながら輸入文化であることや本国のヒップホップの起源との違いという葛藤を乗り越え、こうして日本のヒップホップの歴史はつくられた。

有村 将大（ありむら まさひろ）「近世木下河岸を巡る河岸問屋と村との利害対立—寛政2年の村方騒動を事例として—」

『吉岡家文書』を素材として、近世木下河岸における寛政二年の村方騒動を中心に提起し、旅人の賄いを巡る河岸内外の利権争いの実相を明らかにした。騒動は、問屋の利権が維持される形で決着したが、その後も裁許が破られたこと、また、近隣の布佐河岸も利権に争いに参入したことからも、旅人賄いの利益の高さを窺い知れる。

賈 冉（カゼン）「近代日本の産業—マッチ産業の展開と海外貿易—」

本論文では、近代日本におけるマッチ産業の展開と海外貿易について研究する。日本産マッチの発展、海外への輸出、士族授産との係り及び士族が士族授産金を得た経緯等について、官報等の日本国内史料を研究し論じた。

加藤 雅之（かとう まさゆき）「西師意「治水論」にみる近世日本の治山策と西欧的森林管理制度の融合」

本論文では、西師意「治水論」の第三編「森林編」にて論じられた「治山治水」の思想について考察する。江戸時代に提唱、実施された治山論及び治山策との比較をおこなうことで、その特徴を明らかにする。

葛谷 友恵（くずや ともえ）「幕末における加納藩和傘の生産と流通—専売制の導入による変化に着目して—」

加納藩では和傘の生産が盛んで、1860 年には藩が専売制を開始し、傘を担保とした藩札が流通した程であった。本稿では加納藩の和傘の生産、流通、販売の各形態について、専売制の導入前後の変化に着目して論じた。

佐藤 あかり（さとう あかり）「弘化四年善光寺地震の災害と現代—新潟県中越地震との比較において—」

弘化四年に発生した善光寺地震による災害と、類似した災害を引き起こした平成十六年の新潟県中越地震における、災害への対応と危機認識を比較し、過去の災害から学ばれた現代の対策について考察した。

花島 志歩（はなじま しほ）「近世淀川舟運における柱本煮売茶船の実態と独占営業権をめぐる対立」

江戸時代淀川にて乗合船の客に酒食を提供する柱本茶船の営業実態と、同業者との対立に関する論文である。柱本茶船は役目を勤めることで幕府に独占営業権を認められていたが、他者に権利が侵害されることも多々あり、その中で公的機関の裁決がなされた事例を主に取り上げた。

八木 みずき（やぎ みずき）「飯盛女と飯盛旅籠屋—東海道藤沢宿と川崎宿を事例として—」

本論文は、江戸時代の旅籠屋に飯盛女を置くことで宿場にどのような違いが見られるのかということを明らかにしようとするものである。東海道藤沢宿と川崎宿に焦点を当てて、残された史料を用い、各宿の飯盛女と飯盛旅籠屋の特徴や問題を明らかにした。

**李 旻俊（イ ミンジュン）「韓国と沖縄におけるキリスト教の社会運動—反独裁民主化と
沖縄人権運動のパラダイムについて—」**

沖縄と韓国の社会においてキリスト教は戦後に急速に広がった。そこには、アメリカから派遣されたアメリカ宣教師の献身があり、韓国はアメリカに続いて全世界に宣教師を派遣する国家になった。人口のわずか 1% もいない日本のキリスト教のなかで、沖縄における教会の存在は影響力があると思われる。現代史において韓国のキリスト教は反独裁民主化運動を展開し、沖縄のキリスト教は人権運動を展開した。筆者はこの論文を通して、キリスト教のパラダイムについて研究した。

宇佐美 希（ウサミ ノゾミ）「なぜ撫順戦犯管理所は宥和的な戦犯処理を行ったのか—国内要因・国際要因両方の視点から—」

1950 年 7 月、シベリア送りにされた日本人戦犯たちは中国の撫順戦犯管理所に移管された。そこでは他の管理所と違い、十分な食事や職員からの人道的な処遇が与えられていた。なぜこうした対応が可能だったのか、本論文では国内要因（共産党幹部の思想）と国外要因（中国の国際・経済的地位）の二つの視点から分析している。両方の要因があつてこそ撫順管理所での宥和的措置がなされたというのが筆者の結論である。

蝦名 康平（エビナ コウヘイ）「90 年代に見る中国と台湾の対日感情の差異の形成の過程」

昨今の東アジアを取り巻き、我々日本人に最も身近な問題の 1 つに反日感情がある。この問題については歴史的に大日本帝国が侵略行為を行った事実が大きな要因であるが、同様に侵略・統治を行った国・地域に台湾も挙げられる。しかし、現在では両国・地域の日本に対する感情は相反するものであると言える。本論文では両国の感情の大きな差異が生まれた原因を、90 年代の両国地域での対日政策に大きな要因があると見て、その影響を探りながら比較した。

加藤 理恵（カトウ リエ）「日本の帝国意識の考察—朝鮮学校無償化問題と脱帝国化の課題について—」

朝鮮学校無償化問題は国際社会からの批判も顧みず 2010 年以降続いている。この卒業論文では脱帝国化と脱植民地について触れ、日本社会で続いてきた在日朝鮮人差別と朝鮮学校無償化問題の経緯について整理した上で、それらに見ることができる帝国意識について考察した。最後に日本の加害の歴史を省察することが、中長期的ではあるが帝国意識に変化を起こす方法ではないだろうかと考え筆者の体験を交えつつ記した。

金 海峰（キン カイホウ）「中国朝鮮族ナショナル・アイデンティティ、エスニック・アイデンティティ、トランスナショナル・エスニック・アイデンティティ再考—中国朝鮮族出稼ぎ労働者を対象として—」

1990 年代以降、中国朝鮮族の中で、出稼ぎを目的とする激しい人口移動が生じており、特に韓国への移動の規模とその特性が注目を浴びている。本論文では、主に韓国在住の中国朝鮮族出稼ぎ労働者を対象に、韓国における中国朝鮮族出稼ぎ労働者の形成過程及びその意義、また、強固なアイデンティティを保ってきた朝鮮族の活発な国際移動において、彼らのアイデンティティがどのように変化しているのかを考察した。

全 京浩（ゼン キョウコウ）「中国朝鮮族の人口変移と民族教育—1990 年代以降の人口分散化の視点から—」

中国は改革開放政策実施以来、大規模な人口流動が発生し、東北地区に集住している中国朝鮮族に関しては、近年総人口の半分以上が伝統的な地元である東北を離れて暮らしている。このような朝鮮族の居住地分散化は、民族言語及び伝統文化を担う民族教育に深刻な影響を与えている。本論文では、中韓国交が樹立された 1990 年代から急進行する朝鮮族の人口変移が民族教育にもたらしている諸問題を明らかにし、今後の民族教育及び民族社会の展望について考察した。

野坂 妃菜子（ノサカ ヒナコ）「外国人受け入れの変遷と日本の姿勢」

本卒業論文では、日本における外国人受け入れの歴史を戦後から現代にかけてまとめ、昨今議論されている外国人材受け入れ拡大についての日本の姿勢を分析した。また、政府が目指す改革の概要や問題点、改善すべき点をふまえ、日本が受け入れを通して先進国としての責任を持ちながら国際社会に貢献することができるよう、示すべき姿勢について言及した。日本社会の同質性にも注目し、共生社会実現に向けた社会統合の重要性を強調した。

編集後記

Editor's Note

『日本研究教育年報』23号をお届けします。電子出版となり2号目です。電子出版であることが認知され、そのメリットが生かされ、多くの場所からこの雑誌に載せられた論文が参照されることを願っております。

今年の4月から、東京外国語大学に国際日本学部が発足します。この雑誌を編集している日本専攻の教員組織のあり方も大幅に変わります。したがって、本誌は、次の24号でもって終刊となります。節目となる号ですので、奮ってご投稿頂ければと思います。

本誌は終刊となりますが、東京外国語大学で日本語や日本関係の諸学を学ぶ大学院の学生や卒業生が、自分達の成果を発表して行く場所を確保することは、今後ますます重要となります。関係教員の多くが所属し、大学院国際日本専攻や国際日本学部の母体である国際日本学研究院で発刊されることが企図されている雑誌に、この雑誌が接続できればと考えていますが、次号が出るまでにそのあたりを具体化するつもりです。次号の投稿規定ならびに編集後記をご覧ください。

2019年3月 『日本研究教育年報』編集委員会

編集委員

村尾誠一（編集長・日本文学）

望月圭子（言語学）

阿部新（日本語教育学）

木村正美（国際関係論）

投稿規定

Manuscript Submission Guidelines

1. 投稿原稿の内容

投稿原稿は、未公開のものに限ります。他の学会誌・協会誌、紀要、商業誌などに発表されたもの、および、それらに掲載予定もしくは応募中のものは投稿できません。未公開の卒業論文・修士論文・博士論文の一部などは、その旨を記載して投稿すること。

2. 投稿原稿の書式

使用言語は日本語を原則としますが、他の言語の使用を希望する場合はご相談ください。組版は横組みを基本とし、仕上がり紙面は、「1 ページ＝40 字×36 行、余白＝上：35mm、下・右・左：30mm」（禁則処理 ON）とします。なお、句読点は「。」「、」を原則とします。

3. 投稿原稿の種類と分量は、次の基準によるものとします。

論文：仕上がり紙面 18 ページ（400 字づめ原稿用紙 65 枚相当）以内
研究ノート：仕上がり紙面 12 ページ（400 字づめ原稿用紙 40 枚相当）以内
実践報告：仕上がり紙面 12 ページ（400 字づめ原稿用紙 40 枚相当）以内
短 信：仕上がり紙面 6 ページ（400 字づめ原稿用紙 20 枚相当）以内

4. 投稿の際に提出するもの

投稿の際には、原稿 4 部（正本 1 部、コピー 3 部）と、以下の事項を記した「確認メモ」を提出してください。

- 1) 論文等の日本語題目および英文タイトル
- 2) 仕上がり紙面のページ数
- 3) 氏名の漢字表記（あれば）、ローマ字表記、ひらがな表記
- 4) 住所・電話・FAX 番号、E メールアドレス
- 5) 現在の所属

なお、採用決定後には、完成原稿の電子媒体によるファイルも、提出していただきます。また、いずれの提出物も、原則として返却しません。ご了承ください。

5. 採用・不採用の決定

投稿された原稿の採否は、編集委員会委員および編集委員会から委嘱された審査委員による厳正な査読に基づき、編集委員会の総意によって決定します。

6. 投稿の締め切りと審査結果の通知

投稿の締め切り日は、毎年 9 月末日です。

審査結果は、原則として 11 月中旬までに通知することとします。

7. 本誌に掲載された論文等に関しては、著作者が著作権を有しますが、著作権法で規定する複製権および公衆送信権等については、著作者は国立大学法人東京外国語大学にその使用を許諾するものとします。ご了承の上、投稿してください。

8. 投稿の提出先・問い合わせ先は、次の通りです。

〒183-8534 東京都 府中市 朝日町 3-11-1

東京外国語大学 日本語教育準備室内

『日本研究教育年報』編集委員会

E-Mail: japan.nenpo@tufs.ac.jp

TEL/FAX 042-330-5349（直通）

*本誌は、電子出版され、冊子体の紙媒体による印刷はされません。